

釧路教育研究センター研究グループの活動

今回の「釧路教育」では、令和5年度の子ども支援研究グループ、学習指導・開発研究グループ、郷土読本・地域学習研究グループの各活動について紹介いたします。

【子ども支援研究グループ】

子ども支援研究グループでは、「釧路市内各校における子ども支援に関する課題を踏まえ、いじめ、不登校への対応、個に応じた指導の進め方等について、調査、研究し、釧路市における子ども支援の在り方について、実践を蓄積しその成果を発表すること」を目的とし、「不登校の児童生徒への対応」というテーマのもと、2ヵ年計画で研究を進めています。

昨年度、市内各小中学校の不登校の実態について調査した中で、不登校の要因や背景は多様であるため、支援ニーズも多岐にわたることが明らかになりました。このことから学校には、日頃の児童生徒理解はもとより、当該児童生徒とその家族の話をよく聞き、ニーズを把握した上での対応が求められます。

そこで2年目の今年度は、現在不登校になっている児童生徒の実態や各校の対応事例とその成果について研究を進めてきました。その中で、各校の実態に応じて様々な対応をとっていることがわかりました。右のとおり、一部紹介いたします。

今回の研究内容につきまして、研究紀要としてまとめたものを年度末に市内各校に配付予定となっております。今後の各校の取組の一助となれば幸いです。

★実践編★

不登校担当教諭と連携して対応した事例（小学校高学年）

【児童の実態】

高学年通常学級の児童。同性の友達と少なく、異性の友達と過ごすことが多い。友達とうまくいかなかった時や不安なことがあると連続して欠席する傾向がある。
5月の連休明けに家庭の都合で3日間欠席し、その後続けて体調不良で数日休んだことがきっかけで、登校を渋るようになった。「長い間休んでいたの、友達に何か言われるかも」「宿題を直すのに時間がかかってしまう。」などいろいろな理由で欠席が続いた。
本児童は、就学前教育がなく、保育園や幼稚園にも通っていなかった。集団で生活する場合は小学校が初めてである。

【家庭状況】

兄弟も不登校で家にいることが多い。
両親は、「学校へ行きたくなかったら、無理に行かなくてもいい。」という考えをもっている。

【具体的な取組】

《 担 任 》

- ・2日連続で欠席したため、電話連絡し、保護者から様子を聞く。
- ・登校できない理由を探り、改善点を考える。
- ・不登校担当教諭に相談し、毎日の様子を伝える。
- ・学級の児童の状況について説明をし、いつ来ても受け入れられるようにしておく。
- ・学習面では、朝の宿題直しに負担を感じているようなので、毎朝他の児童が登校する前に学校で学習サポートを行う。

《不登校担当教諭》

- ・担任からの相談を受けた日から、毎日の欠席状況などを細かく確認し記録する。
- ・昼休みに電話連絡したり、家庭訪問をしたりして少しでも登校できるよう働きかける。
- ・不安に感じていることへの対処方法を絵やメモなどにして本人にわかりやすく伝える。
- ・担任と日常的に打ち合わせをして、今後の方向性や支援の方法を考える。
- ・不安を感じた時に居場所として別室を提示し、休み時間など自由に過ごせるようにする。

＜安心できる居場所づくり＞



【今後に向けて】

朝から登校できなくても中休みなどに不登校担当教諭が迎えに行くことで、少しずつ遅れて登校できるようになった。また、本人の居場所として通級指導教室を提案し、教室以外に安心して過ごせる場所を用意したことも登校につながった。

朝の学習なども継続しているが、サポートしてもらえ体制（特別感）を当たり前のよう感じているような様子も見られるので、不安を自分で乗り越えていく力をつける指導も今後は必要になる。



今回は、教室以外の本人の居場所を用意したことで、安心して登校できることにつながった。また、担任と二人になる朝の学習時間を設けることで、児童が今感じている不安を取り除けるようにしたこともポイントとなった。担任一人で抱え込むのではなく、担任外の指導や一時的な別室対応など教職員全員で対応することが大切である。

【不登校児童への対応事例】

【学習指導・開発研究グループ】

情報活用能力体系表【釧路市版 第1版】→



学習指導・開発研究グループでは、「情報活用能力体系表（釧路市版 第1版）」（以降、体系表）をよりよいものにブラッシュアップするために、授業実践に基づき修正してきました。また、資質・能力の3つの柱をバランスよく育成するための各教科等の特性や学習過程を踏まえた1人1台端末の効果的な活用の仕方について、小・中学校における実践例を集めてきました。

体系表については、各校へ送付後、どのように活用しているのかについては、グループ内で共有しています。活用の程度については差があるものの、学校によっては送付した体系表をベースに、独自に内容を精査したり、「情報モラル」や「プログラミング教育」に関する事項を追記したりしている学校があるなど、本グループで作成した体系表が各学校で活用されていることに成果を感じております。

体系表に基づいた授業実践については、本研究グループを中心に次のような実践例を蓄積しています。

校種・学年 教科・単元名	中学校第2学年国語『表現を工夫して書く～手紙や電子メールを書く～』
本時の目標	手紙や電子メールの特徴や書き方について学んだことを生かし、表現を工夫して「暑中見舞い」を書くことができる。
タブレットの基本的操作	タ2 仮名、漢字まじりでローマ字入力することができる（50～60文字/分程度）
授業での活用場面	- 教科書をもとに、手紙や電子メールの特徴や書き方を学習する。 「相手を決めて暑中見舞いを書く」設定で、自分の近況や思いを伝えるための表現を考え、テキスト機能を使って下書きをする。 - 下書き内容の途中経過を、共有機能によってクラス全体で見合う。 - 学習した手紙の書き方のまじりと照らし合わせながら、誤字脱字はないか、自分の近況や思いが伝わる表現になっているかについて見直し、推敲を重ねる。 - 推敲を終えた文章を提出機能を用いて教師に提出し、チェックを受ける。 - 文章を郵便はがきに丁寧に転写し、暑中見舞いを完成させる。
活用効果	「暑中見舞いの下書きの文章を書く」場面でテキスト機能を使用することにより「推敲」をスムーズに行うことができる。（内容の追加や削除、修正がしやすい） - 下書きの途中経過を共有機能を使って見せ合うことで、互いの表現の工夫に触れ、書き方の視野を広げることができる。（学び合い・高め合い）

左表は、「中学校第2学年国語『表現を工夫して書く～手紙や電子メールを書く～』」、下表は、「小学校第4学年社会『水はどこから』」の授業実践例です。

表の3段目に体系表のどこに位置付いているかを明記しており、その下に具体的な実践事例を掲載しました。アプリのアイコンなどを用いて視覚的にわかりやすく構成しています。今回、紹介したもの以外にも中学校数学科や外国語科、小学校社会科や生活科の実践事例があります。

研修講座：1人1台端末を活用した情報活用能力の育成

今年度は、体系表に基づいた授業実践についての理解を深めるために研修講座を開催する予定です。先生方の日々の実践にお役立て頂ける講座にしたいと考えておりますので、たくさんのご参加をお待ちしております。

日時：12月20日（水）13:40～16:00

会場：釧路市立鳥取西中学校

対象：小学校・中学校・義務教育学校・高等学校

授業：中学校第1学年数学「平面図形」

授業者：釧路市立鳥取西中学校 下山 智之

※追加の申込希望がある場合は、釧路市教育委員会教育支援課（23-5189）にご連絡ください。

校種・学年 教科・単元名	小学校第4学年社会『水はどこから』
本時の目標	わたしたちが使う水がどこから送られてくるかを考える活動を通して、水源について知る。
問題解決・探究における情報活用	思1 根拠を明確にして、課題解決に役立つ情報を選ぶことができる。 思3 複数の事実や根拠に基づき、適切に分析・判断することができる。
授業での活用場面	Google Jamboard 「水」について知りたいことや疑問に思ったことを、グループごとに書き込む。 ・学習内容が終わるごとにアプリ内の解決した疑問に丸印をつけていく。
活用効果	一解決した問題を整理することで、新たな課題の発見につなげることができる。 ・学習でわかったこと（付箋）を並べ替えることで、情報の整理、分類、比較ができ、丁寧な考察につながる。 ・グループごとのフレームを用意しておくことで、互いの班のまとめ方について学び合い、高め合うことができる。

【郷土読本・地域学習研究グループ】

郷土読本・地域学習研究グループでは、「郷土読本を効果的に活用したふるさと教育の在り方について研究するとともに、関係機関と連携しながら、郷土読本『くしろ』の内容の検討を行うこと」を目的とし、研究を進めております。

今年度は、昨年度までの研究を引き継ぎ、ふるさと教育の推進役として、よりよい郷土読本『くしろ』の作成に向けて取り組んできました。郷土読本『くしろ』に関わる活動では、ロイロノート・スクールの資料箱の郷土読本に関するデータの更新を中心に、授業をされる先生方にとってより使いやすいものとなるよう整理をしてきました。ふるさと教育については、今年度から新たに釧路市のふるさと教育に関する研究を進めています。釧路市の教育では、「釧路の風土で生まれ 未来に拓く 心豊かな人づくり」という基本理念のもと、以下の教育目標が掲げられています。



【郷土読本に関するデータ例】

教育目標「釧路市教育が目指す人間像」

〈教育目標〉

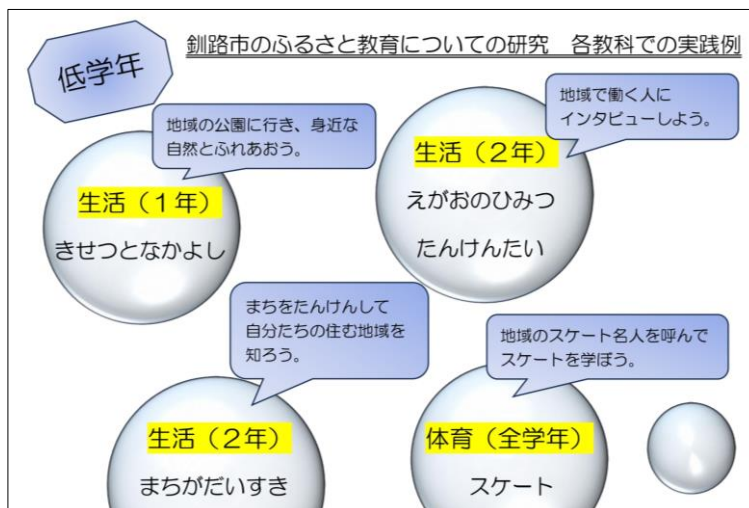
- ふるさと釧路を愛し 活力あるまちに奉仕する人づくり

：ふるさとのよさを知り、郷土を大切にして、勤労に誇りと意欲をもち、地域づくりに貢献する態度を育むこと

(以下省略)

「釧路市教育推進基本計画（２０２３～２０２７年度）」より抜粋

本グループが今年度より進めている「ふるさと教育」の研究では、「ふるさと釧路を愛し 活力あるまちに奉仕する人づくり」を目指し、カリキュラム開発に取り組んでいます。研究では、以下の３つの視点により研究を進めてきました。



【ふるさと教育についての研究 各教科での実践例（一部抜粋）】

３つ目は、「釧路で利用されている『ひと・もの・こと』について、内容ごとに整理してまとめること」で、ふるさと教育に関連する学習の中で活用されている釧路周辺の人材や施設について調査し、活用に向けてリストにまとめています。これらについては、現在作成中のため、完成次第、紹介できるように準備を進めています。

児童生徒が自身の住んでいる地域への愛着と誇りをもてるように、本研究をふるさと教育の実践につなげてほしいと思います。

令和5年度道東地区研究所員研修会報告

日時：令和5年8月25日（金）

場所：網走市オホーツク・文化交流センター

4年ぶりとなる対面での研修会となり、いろいろな地区の教育研究所所員と交流することができ、大変有意義なものとなりました。分科会では、本センター学習指導・研究開発グループの昨年度からの取組を「1人1台端末の活用による情報活用能力の育成」と題して発表いたしました。発表では、釧路市版情報活用能力体系表を作成した経緯と体系表に基づいた授業実践を紹介しました。参加者からは、「体系表と授業実践とのつながりがよくわかった」といった声を頂きました。

また、根室教育研究所の水口拓真氏からは「“管内人材”を生かしたセミナー研修会と内容」をテーマに、根室教育研究所主催の講座や研修会などを企画・運営する際の工夫などについて発表がありました。特に、管内の先生方の力をどのように生かしていくかを大切にしていると紹介がありました。

講演会では、日本体育大学附属高等支援学校長の島崎洋二氏から、「地域とともに歩む学校の創造～地域の人や自然が学びのフィールド～」と題し、特別支援学校を取り巻く環境や日本体育大学附属高等支援学校の取組などについてお話をいただきました。実際に生徒がブドウを育てている学校園場の見学や、収穫したブドウをワインにして卒業生に送る取組についての説明を聴いて、地域のよさを生かした学校運営の在り方についての理解を深めることができました。

次年度は釧路市が開催地となります。今年度の研修会の成果と課題を引き継ぎ、よりよい研修会となるよう尽力いたします。

釧路市立鳥取西中学校 下山 智之

釧路教育研究センター 教育講演会

何故令和の教育改革なのか、

GIGA スクール構想なのか？

～ネクスト GIGA を見据え、教育 DX の先進事例から学ぶ～

講師：文部科学省初等中等教育局学校デジタル化 プロジェクトチームリーダー

武藤 久慶氏

我が国が目指すべき未来社会の姿を背景に、生成AIなどのテクノロジーが進展する時代を生きる子供たちに必要な資質・能力とは何か、また、それらの育成とICT活用についての方策をどのように進めていけばよいのかについて、日常的な活用が進んでいる学校の実践事例を交えながら講演いただきます。

- 日 時 令和6年2月3日（土）
13：30開演（13：00受付開始）
- 場 所 コーチャンフォー釧路文化ホール 小ホール
- 問い合わせ先 釧路市教育委員会教育支援課学校指導担当
0154-23-5189

